

事例3

< 事例概要 >

- ・ 60 歳代、頸椎症性脊髄症の患者。
- ・ 頸椎前方固定術（詳細不明）、腸骨移植術を施行。手術時間は約1 時間半。術中出血量は少量、手術終了後に抜管。
- ・ 病棟帰室から30 分後に咽頭痛の訴えがあり、その後、創部痛が出現。約2 時間後にはドレーンから血性排液が増え、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO₂）99%、頸部腫脹は軽度、発汗著明。痰の貯留を認め数回吸引したが少量であった。息苦しさの訴えがあり、吸引すると激しい体動の直後に意識レベルが低下、気管挿管、輪状甲状靱帯穿刺を試みたが困難であった。開創し血腫除去。気管挿管を実施した。他院に救急搬送し、再度血腫除去術を施行したが、約2 週間後死亡。
- ・ 死因は、気道閉塞に伴う低酸素脳症。死亡時画像診断（Ai）無、解剖無。